

タイトル：2024年度 教育セミナー（第20回）

日時：2024年9月19日（木）～22日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3階大会議室（303）

「戦間期ポート・サイドにおける南部兄弟商会——狭間の時代に狭間の町で栄えた男」

山中由里子（国立民族学博物館）

戦間期のエジプト、ポート・サイドを通過する日本船舶の用達をつとめ、ほとんどの日本人旅行者のエジプト滞在の世話をした一人の日本人がいた。南部憲一（1895～1959）である。南部は、17歳の春に単身ポート・サイドに渡り、イタリア移民が経営する店でしばらく働いた後に独立し、兄弟を呼び寄せ南部兄弟商会を興した。欧州航路華やかなりし時代に、スエズ運河を通過する日本の船舶（軍艦も含む）に対する納入業と、ポート・サイドやスエズで船を降りてカイロやピラミッド観光をする日本人の旅行案内業にたずさわって、身代を築き、地元の名士になった。

戦前の日本と中東の交易の発展につくしたのみならず、日本人のエジプト観光の礎を築き、日本人の中東に対する心象地図の形成に大きく貢献したという意味において非常に重要な人物であるにも関わらず、中東研究者の間でもこの兄弟の存在はほとんど知られていなかった。報告者は、「欧州・朝鮮・南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文化的研究」（科学研究費（基盤B）、代表・橋本順光）の分担者として、日本人の旅行記におけるアデンやポート・サイドの描写を調べるうちに、そこにしばしば登場する「南部商会」、「Nambu Brothers」が気になり、調べ始めた。好奇心をかりたてる数奇な生涯を送ったことのみならず、戦間期にポート・サイドを通過したほとんどの日本人のエジプト観光のお膳立てを担っていたことが分かった。発表では、日本人の旅行記、日本郵船関係の資料、当時の新聞・雑誌記事、外交官の回想録、南部本人が登場する対談記事、そして南部のご遺族からの聞き取り調査や史料提供などをもとに、南部兄弟の足跡を辿った。また、戦間期のポート・サイドにおける

「国際植民地化」という特異な時代的背景の文脈において、なぜこの兄弟が自らのニッチを切り開き、栄えることができたのかを考察し、日本・中東関係史への彼らの貢献を明らかにした。

受講生には、比較文学比較文化研究から、特定の時代の都市空間やそこに生きた人物にどう迫ることができるかという事例を示すことができたかと考える。また、研究の対象とする人物のご遺族への聞き取り調査に際して必要な配慮や、様々な証言や一次史料、そして先行研究から人物像や時代の背景を再構築し、学術的なナラティブを組みあげる手法も提示できたかと思う。報告者の研究では、エジプト現地に残る南部関係の史料や関係者の調査が積み残されているが、この課題はぜひ次の世代の研究者に引き継いでいただきたい。宝はきっとまだ埋もれているはずである。